

「北大史学」第28号 抜刷
一九八八年八月刊

北海道における漁業技術と漁村の形成過程

——幕末期～明治中期を中心に——

デビット・ハウエル

(David Howell)

研究ノート

北海道における漁業技術と漁村の形成過程

幕末期～明治中期を中心に――

デビット・ハウエル

(David Howell)

一

北海道の漁村社会の形成は鯨とその加工品（主に鯨メ粕）の商品化によって可能になった。近世後期、従来の刺網に加えて建網が鯨漁に広く使用されるようになったが、その技術的変革に伴って生産形態や漁村の社会構造も大きく変わったのである。

移動的で小規模な刺網は磯船一艘と三、四人の漁夫で操業できるのに対して、固定的で大規模な建網漁業は一カ統に付き数艘の船と一五人以上の漁夫が必要である。建網の操業費は当然刺網のそれより遙かに高いが、その分、効率もよく漁獲もまた遙かに高い。従って、幕末期以降、資力ある漁業者は建網漁業を経営し、零細な漁民

は刺網を操業したのである。

抑モ建網一統ノ業タルヤ北海道ニアリテハ誠ニ微ナルモノ、如シト雖モ、之ヲ本邦ノ農家ニ比較センニ平均米二百五十石ヲ得、即チ四斗俵トシテ六百二十五俵ヲ得ルモノナルカ故ニ農家ニ比スレハ最モ大農ナルモノナリ。⁽¹⁾

建網漁業と刺網漁業という、異なった生産形態が併存する北海道の漁村における技術と地域社会の形成との関係を明らかにするのが、本稿の目標である。特に、幕末期から明治中期にかけて建網漁業に着手した経営者の経歴を分析して、形成期の漁村社会の特徴を検討したい。即ち、一九〇一年四月の明治漁業法の適用による漁業権の完全な商品化以前の段階における建網漁業者の性格を検討することによって、漁村社会の形成過程を明らかにしたいのである。

二

場所請負人以外の、浜中や二八取といわれる出稼ぎ漁民が初めて筥網や建網などの大網を使用するようになったのは一八四〇年代半ばである。弘化三（一八四六）年二月、余市場所の「筥網持」一人が請負人の林長左衛門に「此度私共筥網遣方の儀奉願上候処、格別の以御憐愍御聞濟被下置、難有仕合奉存候」と始まる議定書を差し出している。⁽²⁾ その翌弘化四年、古平場所においても箱館在三ッ谷村の西宮利三郎なるものが大網を仕立てたといわれる。⁽³⁾

当時、大網漁業はまだ禁じられていたが、請負人を始めとする有力な漁業者はその禁令を広く無視したのである。ところが、ちょうどその頃から不漁に陥った江差在八カ村の漁民は、蝦夷地の建網使用が和人地の不漁を齎したとみて、安政二（一八五五）年春、数十艘の船に乗って古平までの各場所の建網を切斷した。これが有名な網切騒動である。⁽⁴⁾

騒動を起こした漁民は請負人、浜中の建網を差別なく切斷した。西宮利三郎は被害者の一人であるが、同じ和人地出身でありながら困窮する小漁民に同情をみせず、場所請負人と利害を共にして、箱館奉行に対して建網漁業を公認するよう、他の浜中と共に請願運動に参加したのである。

領主（松前公）暴動を惹起せるの故を以て于時建網を厳禁せり。漁業家大いに苦み、日に月に家産を畳み去る者年に次ぐ。出稼人又跡を断ち漁民窮苦、再三許可を得んことを乞ふと雖ども不許。於之、西宮利三郎氏空手傍観するの日に非ずとなし、雄奮総代と

なり函館奉行に就き百万奔走備さに利害を陳述し、漸く此に許さるゝを得たり。故に其当時建網を行ふもの氏の力に有るのみ。⁽⁵⁾

事件はその後、漁業者が建網一カ統に付き三両の冥加金を納め、その三分の二を八カ村の小漁民救済のために充てるといふ妥協策で落着いたのである。

建網漁業が公認されてから各場所ですく建網を仕立てる漁業者が続出した。余市場所でも、筥網漁を始めてからちょうど一二年、安政五（一八五八）年二月に一四人の浜中が次の議定書を作成している。

一、右大網持、松前白神村次郎兵衛外八人、新大網持、同所塩吹村長吉外四人、都合十四投ヲ以、是迄筥網建網取交り、昼斗漁業致候処、今般昼夜建網漁業相願に付、請負人并浜方、小前、土人共に至迄漁業相統方の儀に付、夫々御取調に相成、当年より新古大網十四投の分以来筥網は相止メ、不残建網にいたし候筈、浜方一同漁業相統出来仕、難渡の者無御座候。尤去ル巳三月中奉申上候通、大網の方大漁の節は、小前の者江夫々手当いたし、大時化にて差網流失致、漁業相統兼候ものエは差網貸渡、渡世為致候積り、規定取極仕候上は、以来漁業筋の儀に付、御願ケ間敷儀、一切無御座候。然上は御趣意の趣堅く相守、近々妻子召連永住相願、漁業間合ニ田畑開発仕、浜方為筋に相成候様、万端実意ヲ以、申合可仕候。銘々自分勝手手の儀を以、異論申立候もの御座候は、其段御訴申上候様可仕候。依て議定書連印仕、此段以書付奉申上候。以上。

安政五年二月（連署略）

ヨイチ御用所

この議定書は明らかに網切騒動の影響を受けて作成されたものといえよう。建網漁業の利益を均霑させることや、刺網漁民が悪天候などによって被害を蒙ったときにそれを助けることを約束しているところは興味深い。⁽⁷⁾「小前之者惣代」五名が「私共漁業相続出来、差支の儀一切無御座候」と建網漁業を承諾しているのも注目すべきである。

幕末期に至って、請負人の役割は自営漁業よりも出稼ぎ漁民を掌握することが中心になっていったことは周知の通りであるが、少なくとも余市では、請負人以外の浜中でも、建網漁業に踏み切った時点で公的な責任を負うことになっていたのである。

浜中でありながら、他の出稼ぎ漁民に対してこのような責任を負うようになったのは、上述のように、網切騒動の結果である。しかし、網切騒動の目的はあくまでも衰退する和入地の前浜漁業を守ることなのに、余市の建網漁業者の責任の対象は、既に余市に永住している刺網漁民である（和入地在住の小漁民は建網冥加金を受けて、間接的に利益を得るに過ぎなかった）。従って、議定書の内容は、再度の騒動を防ぐためというよりも、むしろ幕府の蝦夷地開拓政策の一環として請負場所に永住者を増やそうとする方針を意識して作成されたと理解したほうが妥当であろう。建網漁業者が余市へ移住することを約束しているのもこれを裏付けるのである。

時化で刺網が流失した際に代わりの網を貸付けるのはともかくとして、建網が大漁すれば刺網漁民に手当を支払うのは、小漁民が困窮しているか否かとは関係のないことである。つまり、建網冥加金が「損害賠償」に相当するのに対して、大漁手当は「利益配当」のようなものである。建網という新しい生産手段を用いること自体

が、その生産性の高さに由来する公的責任を伴うのである。結局、建網漁業者は高度な生産技術を有するために、形成期漁村において、少なくとも刺網漁民に対しては、請負人に類似した役割を果たす必要があり、またその義務もあったのである。

請負人自身が建網持ち浜中との類似性を利用することがあった。磯谷、歌棄両場所の請負人で、浜増毛場所の請負人中川屋勇助の代勤を務めた佐藤栄右衛門は、慶応二（一八六六）年五月付の書簡で勇助に建網冥加金を三両から六両に引き上げざることを勧めたのである。その先例として増毛場所を挙げているが、浜増毛でも「当年より格外増御運上被仰付」たから、冥加金の増徴収は「可然事」という。⁽⁸⁾場所請負権の象徴ともいえるべき運上金の一部を建網持ち浜中に負担させようというのである。

これまでみてきたように、高度な技術を所有する建網持ち浜中は、請負人に対して発言力を強めることによって、形成期の漁村社会において、請負人と共に支配的な地位を確保したのである。

明治二年九月の請負制の廃止に伴う漁業の開放は建網漁業を飛躍させたが、経営者の性格がどう変わったかを明らかにするために、高崎龍太郎著『家屋図入北海立志編』（全四巻、一八九三〜一九七七年刊）と桂源五著『岩内古宇二郡誌』（一八九四年刊）所収の略伝を中心に、一九世紀後半の建網漁業者の経歴を分析してみたいと思う。

三

『岩内古宇二郡誌』も『北海立志編』もいわゆる繁昌物であるが、⁽⁹⁾

いずれも全部または一部の紙面を建網漁業者を含めた地域の豪商の略伝に充てている。

なお、実際に各地域に現住している漁業者以外はほとんど掲載されていないので、道南や本州からの出稼ぎ漁業者や複数の地域に漁場を持つ大規模な経営者が例外的にしか含まれていないことを断っておく必要がある。従って、『岩内古宇二郡誌』及び『北海立志編』の記述より形成期の漁村社会の様子を窺い知ることができても、地域経済を動かす仕込資本家や最も有力な広域漁業経営者の実態が記述に反映されていないから、経済構造の全貌を明らかにすることはできないのである。

伝記の内容に関しては、「事実ノ錯乱」⁽¹⁰⁾があったり、漁業者の実績を誇張したりすることがあっても、意識的に事実を改竄することが少ないと思われる。略伝を読めば、建網漁業者が出世する以前に「頗ル辛酸ヲ嘗メ」るのは、本人が他の事業に失敗したり、自ら故郷にいらなくなる事情に陥ったりすることが多いのに気が付く。例えば、古宇郡の沢口豊治郎について、「歳十七、花柳に一身を過まり、渺なからざる金銭を浪費し、遂に（養家より）離縁せらる。（中略）帰国するも養家は勿論、実家へも立戻る能はず。大いに窮す。（中略）内地を出発して当道に渡り、古宇郡泊村に至る」というような記述は全体の内容に説得力を与えるのである。

さて、略伝の内容を整理してみると、場所請負制廃止以後の建網漁業者を大きく三種類に分類することができる。

一つは刺網漁民が建網業者に発展するパターンである。幕末期の有力な浜中漁民はその典型で、天保期以降、日本海沿岸部各地に移住し、あるいは出稼ぎ漁業の形を保ちつつ建網漁業を行ったのであ

る。

初期の建網漁業者は当然和入地でも決して零細な漁民ではなかったはずである。多くの浜中については詳しいことは判明しないが、上述の余市の議定書に連署している上ノ国村出身の二人の建網持ち浜中、平蔵と久右衛門は、村役人の久末平蔵と笹浪久右衛門ではないかと思われる。⁽¹¹⁾

彼らは余市で建網を操業しながら地元でも漁業経営を続けたのである。安政六（一八五九）年六月、平蔵と久右衛門は外三名と共に、上ノ国村前浜において鯛建網漁業の公認を願い出ている。また、笹浪久右衛門は上ノ国村で最も大規模な経営を行っていた一人で、上ノ国村前浜で鯛建網を仕立てた最初の人物であり、前浜はもろろん、苦前方面でも仕込親方として活躍した人物でもある。⁽¹²⁾

もう一つの種類は多くの請負人の基本的なパターンである。即ち、従来漁業と縁の薄い商人が商業的鯨漁業を試みるものである。確かに、場所請負制は松前藩や幕府の保護を受けて成り立ったものであるから、自力で経営基盤を築き上げた後の商業出身の建網漁業者とは性格が異なるが、あくまでも「商人」であって、「漁民」ではないところは明治期の経営者と全く同じである。

浜増毛の中川屋勇助はその一人である。彼は函館を根拠地として回漕業を営んでいたが、伊達林右衛門が請負権を放棄した際、漁業の経験が全く無いのにも拘らず、浜増毛を支配していた庄内藩に抜擢されて請負人になったのである。その子孫は昭和初期まで浜益において漁業を経営したという。⁽¹³⁾

また一つの形態は旧請負人その他の建網漁業者の組織の中で働いて、支配人や帳場役を経て、あるいは親方の養子になって、独立経

表2 宗谷・枝幸・利尻・礼文郡の建網漁業者

	漁業者名	分類	建網漁業着手年		漁業者名	分類	建網漁業着手年
1	桐山三四郎	元他種漁業者	1869以後	18	佐々木利吉	元漁夫	1892
2	佐藤重太郎	"	1883以後	19	奈良長七	"	1892
3	長峰鉄蔵	"	1884	20	村上熊作	"	1892
4	成田与之吉	"	1885～95間	21	松館貞作	"	1895
5	長山善八	"	1885～91間	22	泉谷伊七郎	商人	1887か
6	新田金作	"	1889頃	23	豊原善次郎	"	1887以後
7	神成広吉	"	1889頃	24	藤山要吉	"	1888
8	藤巻末吉	"	1889	25	金清兵衛	"	1889
9	小沼平三郎	"	1891	26	鈴木平八	"	1890
10	佐賀長兵衛	元漁夫	1877	27	長内幾三郎	"	1890
11	白坂藤吉	"	1879以後	28	菅原太蔵	"	1893
12	高島兼蔵	"	1880年代か	29	鈴木孫八	"	1893
13	網島貞助	"	1885	30	原田嘉七	"	1895頃
14	村田宇太郎	"	1886	31	村岡竹蔵	"	1895
15	松本幸三	"	1887	32	小野寺林助	"	1896
16	三ツ井甚右衛門	"	1888	33	末富伊八	"	1896
17	松本忠次郎	"	1889	34	菅原富吉	"	1897

高崎龍太郎『家屋図入北海立志編』（函館：北島社，1897年）より作成

営に発展するパターンである。この場合、親方から資金や海産干場を借り受けて起業するのが普通で、独立してすぐ建網を仕立てるものもあれば、しばらく刺網を操業してから建網に転換するものもいたのである。

このような経営者の最も早い例として、古宇郡神恵内村の滝沢長助が挙げられる。文政一一（一八二八）年頃彼は、古宇郡の請負人、田村新十郎方に雇夫となり、漁業其他に使役せられ居ること数年、夫れより同運上家の仕送と懇切なる斡旋とを受け、同郡同村内に僅かに差網漁業を為すことを得たり。就業四、五年、今を去る三十八年前、安政三年春期初めて建網を行使し、年々漁獲大に増加するに至れり。

さて、表1・2に岩内・古宇郡及び宗谷・枝幸・利尻・礼文郡の建網漁業者が掲載されている。漁業者を「元他種漁業者」（主として鯨刺網漁、「元漁夫」などの雇い人、及び「商人」の三グループに分類して、各グループを建網漁業着手順に配列した。

なお、各経営者が建網漁業に着手するまでの間、一応複数のグループに該当する者が少なくない。従って、分類するに当たって、最も直接的に建網漁業への発展を可能にしたものを分類の要点にした。例えば、若い頃雇い漁夫を経験し、のち独立して商人になり、そして自ら建網漁業を経営するような漁業者は、自己の商業資本を基にして建網漁業を行うので、「商人」として分類した。しかし、雇い漁夫が雇い主より漁具や資本を借り受けて、数年間刺網を操

表1 岩内・古宇郡の建網漁業者

	漁業者名	分類	建網漁業着手年		漁業者名	分類	建網漁業着手年
1	西宮利三郎	元他種漁業者	1847弘化	29	佐々木末治	元漁夫	1881
2	武井忠兵衛	"	弘化～安政期	30	坂本六兵衛	"	1885
3	石橋角兵衛	"	1853	31	高崎和三郎	"	1885
4	川村長次郎	"	1859	32	松田金蔵	"	1887
5	新井田三郎兵衛	"	1865頃	33	田付新十郎	商人	1845
6	梅沢市太郎	"	明治初年	34	川村慶次郎	"	1847
7	山崎友七	"	明治初年	35	能登甚四郎	"	1865
8	兵藤富蔵	"	1873以後	36	大島順兵衛	"	明治初年
9	高坂岩吉	"	1880	37	野口文蔵	"	1872以後
10	佐々木長之助	"	1881	38	佐野川弘治	"	1873
11	小林孫蔵	"	1887	39	松浪栄太郎	"	1873
12	滝沢長助	元漁夫	1856	40	田中多四郎	"	1876
13	沢口庄助	"	1859	41	池田亀吉	"	1878
14	石井金助	"	1859頃	42	大森多蔵	"	1880
15	金沢源之助	"	1861頃	43	大井昌次郎	"	1880頃
16	畑沢要吉	"	1862	44	阿部幾太郎	"	1880年代
17	佐藤勘六	"	1865以後	45	酒谷長兵衛	"	1882
18	田中福松	"	明治初年	46	大崎亀吉	"	1883
19	川浦長蔵	"	1869	47	横内富蔵	"	1884
20	木下寅吉	"	1871	48	小倉十兵衛	"	1886
21	井口利助	"	1873	49	金子佐太郎	"	1886
22	岩泉武右衛門	"	1873	50	庭山文吉	"	1886
23	川吉伝兵衛	"	1877	51	渡辺治三郎	"	1886
24	高橋勇助	"	1877頃	52	高野六蔵	"	1888
25	沢口豊治郎	"	1878	53	元井徳次郎	"	1891
26	万寿八十右衛門	"	1879	54	種田金次郎	"	1891頃
27	新井田福太郎	"	1879以後	55	梁瀬政治	"	1892か
28	浜喜三郎	"	1880以前	56	金子喜七郎	"	1893

桂源五『岩内古宇二郡誌』（岩内：桂源五，1894年）及び高崎龍太郎『家屋図入北海立志編』（函館：北島社，1893年）より作成

業してから建網に転換するような場合は、独立経営を可能にするのが雇い主の資本力と幹旋であるから、「漁夫」として分類した。中にはいくつかの微妙なケースも当然含まれているが、データは複雑な分類法を支えるだけの正確さを欠くので、結局、著者の主観的な判断によって分類する以外方法がないのである。

表1に岩内・古宇両郡の五六人の建網漁業者が挙げられている。分類別にみると、「元他種漁業者」が二人(約二〇%)、「元漁夫」が二人(三八%)で、「商人」が二十四人(四三%)という内訳になる。つまり、一八九四年現在の建網漁業者の八割が元々自営漁民ではないことが判明する。

いずれのグループからも幕末期に既に建網漁業者が出ていた。ただし、主として元刺網漁民からなる「元他種漁業者」の一人の内の五人が幕末、八人が明治一〇年頃までに建網を操業しているのである。それに対して、「元漁夫」は一八七〇年代に最も多く転換しており(二人中九人)、商人は一八八〇年代及び九〇年代前半に二人中一人も集中しているのである。時期が遅ければ遅いほど、商業資本の漁業経営への進出が目立ち、逆に小漁民の大規模化が困難になったと思われる。

表2の宗谷地方の状況をみて似たような内訳になる。三四人の内、「元他種漁業者」が九人(約二七%)、「元漁夫」が二人(三五%)、「商人」が一人(三八%)で、従前の漁民以外の経営者が全体の四分の三近くを占める計算になるのである。

場所請負人以外の漁業者の進出の遅れた宗谷地方ではさすがに明治以前からの経営者はみられず、二人以外はすべて一八八〇年代以降に建網漁業に着手しているが、「元他種漁業者」がやや早く、

「商人」がやや遅く起業しているのも岩内・古宇地方と同様の特徴である。

各漁業者の経営規模については正確なことを知るのは困難であるが、一般的に一カ統から二、三カ統程度の比較的小規模な経営が建網漁業者には多かったようである。一八九二年の『北海道水産予察調査報告』によると「積丹ヨリ小樽ニ至ルノ間ハ建網漁場最モ盛ナル処ニシテ漁家ノ富モ亦平均スルガ故ニ一人二、三統ヲ有スルモノ普通ニシテ五、六統ヲ有スルモノ少カラズ。(中略)宗谷、枝幸ノ地方ハ一人数統ヲ有スルモノヲ大トシ二、三統ヲ普通トス」とい

表1・2の建網漁業者の経営規模を考える場合、「渡島、後志地方ハ常住者多」いが、「利尻、礼文ニハ秋田、庄内地方ノ漁民ト西海岸各地漁民トノ入稼多ク、宗谷、枝幸ハ寄留者ト入稼者ト相半」(21)することを計算に入れなければならない。殊に増毛以北の地域では、藤野、栖原、伊達などの旧場所請負人は明治になっても他の漁業者より遙かに大きな規模で経営を続けた。しかし、彼らは決して漁場の所在地へ移住しなかったのである。また、利尻島においても明治中期以降、積丹半島周辺から「すでに本拠地には相当規模の建網漁場を所有する経営者」が進出して、出稼ぎ先でも重要な地位を占めたことが知られる。(22)

それでも相当大規模な漁業経営を行うものもいたのである。特に自己の商業資本を経営基盤にして建網漁業に手を出すものは当然競争上有利である。一八八八年から九六年の僅か八年間で宗谷、紋別、常呂、斜里の各地で建網二六カ統、鮭建網七カ統という大規模な経営を築き上げた藤山要吉は、肥料問屋として蓄積した資本力

に頼って大漁業者の地位を獲得したのである。経営が軌道に乗るまで彼は「年々巨資ヲ投シテ、更ニ数多ノ漁場ヲ買入レ(中略)漸次業務ヲ拡張シ、廿五年断然肥料問屋ノ業ヲ廃止シテ専ハラ身自ラ漁業ニ委ネ」たというが、刺網漁業からの転換者だったとしても「年々巨資ヲ投」じするような余裕がないから不漁に遭ったらすぐ倒産するが、漁場を仕込商人の手に渡すかの状態に陥るのを免れない。有力な商人の漁業経営が漁村の形成に少なからぬ影響を及ぼすことはいまでもない。旧場所請負人が漁夫を独立させるのはその典型で、後進地である宗谷地方では藤野、栖原、伊達のいずれとも全く関係のない経営者はむしろ例外的といってもいい程である。しかし、藤山要吉のような新興漁業者も元雇い人を通して地域経済を掌握することもあったのである。例えば、一八九一年から二年間、藤山漁場の支配人を勤めた山内永吉は一八九三年から稚内において海産物、荒物商として独立できたのは実に「主家ニ仕ヒ忠勤ノ功」というべきであろう。(24)

しかし、藤山要吉のように一気に大規模な経営を始めるのは珍しいようで、岩内の金子喜七郎のほうが代表的であろう。一八四五年佐渡で生まれ、六四年から季節的に江差に渡り太物の行商人になった。二年後に岩内に永住し、雑貨商の傍ら質屋を営業したが、七二年に和船二艘を購入して回漕業にも手を出して大成功したという。七五年に質屋を廃して、八九年から酒造業を始めたが、その頃から漁民に仕込をなして九三年中いよいよ自らも建網漁業に従事するに至ったという。(25)略伝では言及していないが、自営漁業を試みる契機が仕込資金の貸し倒れで担保を入手したと想像される。

刺網漁民にとっては、建網漁業への道は長年の努力と連年の好漁

にあったようである。岩内の佐々木長之助の場合は、一八五九年南部三戸に生まれて、七三年に父親と一緒に岩内へ「移住し差網二十流に漁場一ヶ所を構ひ親子携帶漁業に従事せり。後同一四(一八八八)年に至り現今の海産十場千八百余坪を七百五十円に買受け建網二統」を操業したという。(26)

漁夫としては独立経営をするための最も確実な方法は人生の大半を有力漁業者の商店に勤めることであった。佐賀長兵衛はそのお手本ともいえるべきである。天保時代以来、樺太で栖原家、宗谷で藤野家、伊達家、栖原家と「漁場ノ什物ノ如ク彼ヨリ是ニ引渡サレ」、ようやく一八七七年に独立して、福山の從二字右衛門から仕込を受けて建網漁業に従事したという。当初「年々失敗ヲ蒙」ったが、「取引上正直ナルカ故ニ弥々金主ノ信スル所トナリ、明治二十年頃ヨリ漸次開運ノ期ニ向」って、自営五カ統の外、約二五カ統を所有するに至ったという。(27)

四

一八六九年の場所請負制の廃止によって北海道の鯉漁業が開放されたが、特権を喪失した請負人に代わって支配的な位置についたのは、主として旧和入地の刺網漁民ではなく、商人のように直接的にせよ、元漁夫のように間接的にせよ、商業資本と深いかわりを持つ経営者である。

刺網漁民は経営資金の仕込を通じて商人の経済的な支配を受けてきたが、明治中期に至っては漁業経営自体も商人など、「真の漁民」以外の手に集中するようになったのである。明治漁業法によって漁

業権の抵当が正式に認められるようになってからはその傾向が益々強まったに違いない。

何故幕末期に勢力を増していた有力浜中漁民がそのまま明治期の漁村を支配するようにならなかったか。何と云っても、建網持ち浜中が和入地漁村に本拠を持ち、明治になっても特に必要がない限り漁場所在地に移住しないで、出稼ぎ漁業を継続したことが大きな要因といえよう。

和入地では、上ノ国村の笹浪家のように、漁業を本職としながら商業に進出する経営者が漁村社会の支配者層を形成したのである。しかし、新しい漁村では、移住してきたのが零細刺網漁民で、その多くは建網漁業を営む資本力がないので、有力浜中のような経営を築き上げられず、和入地漁村社会の形態を復元することができなかったのである。

それに対して、新興商人は漁村に居住し、蓄積した資本を地元漁場に投資したのである。それを可能にしたのは、経営者が自ら漁業に従事しなくても操業を支配人に委ねることが容易にできるといふ、疎建網漁業の特質である。結局、従来のパターンとは反対に、商業を本職として漁業に進出する商人が支配的な地位を獲得したわけである。

明治期の建網漁業者は零細漁民を保護しない代わりに、雇い漁夫の独立経営を斡旋することがしばしばあったようである。元漁夫が建網漁業者の全体の三分の一以上を占めたのも正にそのためである。建網持ち浜中の大漁手当が漁村全体に対する責任だとすれば、商人の漁夫への斡旋は、関連経営者を作り出すことによって自己の経営基盤をより確実なものにするためであるといえよう。幕末の有

力浜中中心の「共同体」の現出に対して、近代中期の漁村は商人中心の「企業グループ」によって象徴される。

商人の漁業経営は漁村社会をある程度流動的なものにしたのである。元漁夫の建網漁業者の多さは、従来の形態と違って、漁村社会を単純に建網漁業者、刺網漁民、雇い漁夫の三階層に分けられないことを意味する。賃金収入に全面的に依存する雇い漁夫が漁村社会の底辺に在ることはいうまでもないが、この時期には階級がまだ固定しないから、漁夫として働くものは必ずしもそのまま底辺に定着しなかったのである。

本人の努力と好運を無視できないが、結局漁夫が経営者に発展し得た要因は、一つは形成期の漁村社会が未だ成熟しないうちに漁夫が既に経営基盤が確立している漁業者の養子になって相続者として漁業権を獲得できたことと、もう一つは大規模な漁業者の経営組織がほぼ企業化して、「サラマン的」な漁夫が出現したことである。

幕末から明治中期にかけて、北海道の漁村の性格を決定する過程においては、建網の現出と普及という技術な要求が非常に大きな意味を持つのである。小漁民の経済力を上回る操業費を必要とする疎建網は、請負人や少数の有力浜中によって独占される時点では漁村の形成を従来の方向への発展を促進したが、明治期に商業資本が積極的に漁業経営に乗り出すようになってからは商人とその雇い人が漁業操業と共に漁村社会を支配するようになったのである。同時に、元刺網漁民などの「真の漁民」が建網漁業の二、三割に過ぎないという、皮肉な結果を齎したのである。

注

- (1) 高崎龍太郎『家屋図入北海道立志編完』（東京、高崎龍太郎、一八九七年）三三丁。なお、本稿においては史料の引用文に句読点を付し、漢字は現代使用漢字を使い、また、仮名を普通仮名に改めた。
- (2) 余市町史編集室編『余市町史』第一巻資料編一（林家文書）（余市、余市町、一九八五年）、五五四―五五五頁。なお、本文書の日付は「弘化二年二月」となっているが、これは弘化三年の誤りと思われる（同書四六三―四六四頁参照）。
- (3) 桂源五『岩内古字二郡誌』（岩内、桂源五、一八九四年）、一二八頁。
- (4) 北海道庁編『新撰北海道史』（札幌、北海道庁、一九三七年）第二巻、六〇四―六〇六頁。白山友正「蝦夷地網切騒動始末―近世疎網発達史素描―」『日本歴史』二五七（一九六九年一〇月）、一〇四―一〇八頁も参照されたい。
- (5) 桂『岩内古字二郡誌』一二八―一三〇頁。
- (6) 『余市町史』五九二―五九三頁。
- (7) 『余市町史』五九三頁。
- (8) 田端宏「明治初期の漁業制度について―漁場持制度の考察―」『新しい道史』四一（一九七〇年八月）、一一―一五頁、山田健「北海道高島地方における疎漁業の成立」桑原真人編『北海道の研究』（大阪、清文堂、一九八三年）第六巻、一五九―二〇七頁など。
- (9) 「浜増毛要書綴込」佐藤家文書（整理番号B10）北海
- 道大学付属図書館・北方資料室所蔵。
- (10) 田島佳也「近世後期漁獲疎の集荷過程―西蝦夷地余市場所を例として―」『歴史と民俗・神奈川大学日本常民文化研究所論集』一（一九八六年四月）一六七頁。
- (11) 小林真人『家屋図入北海道立志編』（抄）解題『松前町史』資料編四（松前町、松前町史編集室編、一九八〇年）七四一―七四二頁。『北海道立志編』は市立函館図書館に現存するのは、一八九三、九六、九七年各一冊と年代不詳一冊の計四冊からなっている。一八九三年のものは岩内・古宇郡、一八九六年は松前・檜山・爾志・岩内・古宇郡、一八九七年は宗谷・利尻・礼文・枝幸郡、年代不詳は松前・檜山・爾志・久遠・瀬棚郡を網羅しているが、同一郡が二冊に含まれている場合は内容が重複している。なお、本稿においては岩内、古宇、宗谷、枝幸、利尻、礼文の諸郡のみを検討する。
- (12) 高崎『家屋図入北海道立志編』（一八九三年本）凡例。
- (13) 高崎『家屋図入北海道立志編』（一八九三年本）自叙。
- (14) 桂『岩内古字二郡誌』一五〇頁。
- (15) 安政五年現在、笹浪久右衛門は上ノ国村の年寄で久末平蔵は元年寄であったが、文久二（一八六二）年には久右衛門は名主になっている。松崎岩穂『上ノ国村史』（上ノ国、上ノ国村役場、一九五六年）一二八―一二九頁。
- (16) 「諸用書留帳」笹浪家文書（整理番号簿二九）北海道大学付属図書館・北方資料室所蔵。
- (17) 北水協会編『北海道漁業志稿』（札幌、北水協会、一九三五年）、七七二頁。仕込親方としての活動については例えば、

「トマ、イ場所仕送仲間覚帳・利足付」安政六、慶応三年、
笹浪家文書（整理番号簿三一）北海道大学付属図書館・北方
資料室所蔵などを参照されたい。

(18) 北水協会『北海道漁業志稿』八一—八二三頁。

(19) 桂『岩内古宇二郡誌』一三九頁。

(20) 北海道庁内務水産課編『北海道水産予察調査報告』（札幌、
北海道庁、一八九二年）、一三七頁。

(21) 『北海道水産予察調査報告』一三五頁。

(22) 山田健「利尻島における鯨定置漁業権の存在形態」『免許
漁業原簿』の内容と考察―『北海道開拓記念館調査報告』

二四（一九八五年）四〇—四一頁。

(23) 高崎『家屋図入北海立志編』（一八九七年本）二三丁。

(24) 高崎『家屋図入北海立志編』（一八九七年本）二三丁。

(25) 桂『岩内古宇二郡誌』九四頁。

(26) 桂『岩内古宇二郡誌』一二〇頁。

(27) 高崎『家屋図入北海立志編』（一八九七年本）四七丁。

付記

本稿を作成するに当たり、北海道大学文学部永井秀夫教授に
貴重な助言を戴いた。また、本稿は著者が国際交流基金の博
士論文フェローとして滞日中に作成したものである。併せて
感謝の意を表したい。

among kabuki as art, commerce and propaganda: he quotes the theater historian Ozawa Ryōzō's remark that "commercial theater strikes a pose of genuinely adapting to the New Order [Shin Taisei] Movement, but at heart management must follow a policy of earning a profit" (186-187). Nonetheless Brandon finds that "kabuki was an active player in government movements and campaigns tied to the national war mission" (321) and lists many authors who wrote "war plays for kabuki production" (337).

Yet kabuki's importance ebbed after 1940. The following year only nine new kabuki plays "offered even oblique commentary" (167) on the war, and despite its efforts to support government policy, already by 1942 kabuki was being criticized as immoral because it was a commercial theatre grounded in capitalist individualism. Three years later "kabuki was no longer relevant in Japan's final death struggle" (309): by 1945 "military requirements caused the material shortages that curtailed kabuki production at home. Japanese bureaucrats closed the large theaters . . . and forced troupes to undertake stripped down consolation tours in the provinces, thereby emasculating the repertory" (317-318). "Kabuki was close to death in August 1945" (xii), and so Brandon asks rhetorically, "In the final analysis, did kabuki really matter? By the end of the war it mattered hardly at all" (93).

Pre-production censorship starting in the 1930s aimed at eliminating immoral, erotic and obscene material from the stage. In wartime, Brandon reports, an astounding 1,730 professional theatre groups, including almost 200 kabuki troupes, sent scripts for approval to Special Higher Police censors in dozens of locations (32). In 1940, facing a drawn-out struggle in China, the government instructed playwrights to tone down their treatments of the fighting. The following year Tokyo censors received an astonishing 3,081 plays, fewer than 8 percent of them kabuki dramas, and passed nearly all without change (174). In 1942 the number of scripts submitted in Tokyo rose to 3,409, a clear indication of a vibrant theatre in the metropolis; self-censorship helps to explain why the majority were cleared for production without alteration (227). The following year the government decreed that "every performance must heighten national morale and increase war production" (248), yet kabuki and other "old plays" continued to represent only one-tenth of theatre offerings nationwide. Although kabuki was increasingly dismissed as a capitalist extravagance and only a few new kabuki dramas were written in 1944, the form somehow thrived in the Kansai region. Remarkably, plays continued to be produced well into 1945 despite deteriorating battlefield and home-front conditions.

Kabuki's Forgotten War 1931-1945 details wartime rivalries among Shōchiku, Tōhō and independent companies such as New Commando (Shin'ei) and concludes that Shōchiku "committed itself to a wholly classical repertory" (321) during 1945-1947 because its top officers "still believed in the wartime values of sacrifice for the nation and loyalty to the emperor" (347).

Censorship by the American occupation after August 1945 proved to be "quite restrained and as a consequence ineffectual" (353), and thus "kabuki conquered its conquerors" (356).

At times Brandon's prolonged reiterations of the larger military and political context of wartime Japan raise unanswered questions, but overall the volume is a very helpful reference for Japanese theater during 1931-1945 that will undoubtedly inspire further research.

Northeastern University, Boston, USA

TOM HAVENS

THE AGE OF VISIONS AND ARGUMENTS: Parliamentarianism and the National Public Sphere in Early Meiji Japan. By Kyu Hyun Kim. Cambridge (MA) and London (UK): Harvard University Asia Center (distributed by Harvard University Press), 2007. xxiii, 520 pp. (Maps, figures, tables.) US\$49.50, cloth. ISBN 978-0-674-01776-4.

A standard account of the origins of Japan's constitutional order credits the Meiji oligarchs with the foresight to bestow just enough democracy on Japan to get by—just enough, that is, to co-opt the burgeoning Freedom and Popular Rights Movement of the 1870s and early 1880s without compromising the authoritarian power of the state. A standard account of the Freedom and Popular Rights Movement lionizes the activists who fought valiantly for democracy until they were crushed under the heel of the repressive state in conflicts like the Fukushima Incident of 1882 and the Chichibu Incident of 1884.

In this excellent new book, Kyu Hyun Kim takes a different approach to Meiji politics, moving beyond the heroic narratives of prescient oligarchs and doomed democrats to provide a detailed and nuanced account of parliamentarianism and what he calls the national public sphere in the latter part of the nineteenth century. In Kim's portrayal, officials and activists often disagreed, even bitterly, on matters of policy, but they shared a fundamental worldview and drew on the same constellation of ideas about Japan's best path to the future. Radicals—republican and nativist alike—were outliers, while the mainstream of participants in parliamentarian discourse fell somewhere along the spectrum between British and Prussian models of government.

Although the book deals extensively with parliamentarian activism, Kim stresses that it is not a history of the Freedom and Popular Rights Movement per se. The violent incidents that epitomize the movement in accounts like Roger Bowen's *Rebellion and Democracy in Meiji Japan* (Berkeley: University of California Press, 1980) get only passing mention in the text, which focuses instead on the newspapers, community associations and oratory that constituted the public sphere of early Meiji Japan. These media were the

“communicative networks” that circulated parliamentary ideas around the country and fostered “active collaboration among ex-government officials, metropolitan intellectuals, and local notables,” who in turn created the national political organizations necessary for the realization of parliamentary government (413-14).

Kim’s argument is rich with irony. The combination of a weak state and an expanding public sphere in the first decade or so of Meiji gave rise to a vigorous parliamentary movement. In the mid-1870s, when government leaders finally acknowledged the desirability of some sort of parliamentary system, leading thinkers among activists and officials alike were attracted to a British model of constitutional monarchy. Over time, however, the growing energy of the parliamentary movement forced the state to strengthen itself in response, and this in turn led to the adoption of a much more conservative model of governance—the Prussian one—than would have appeared likely even in the early 1880s. The very strength of the parliamentary movement, in other words, may have derailed imperial Japan’s prospects for a comparatively liberal democratic order.

With 452 pages of main text, *The Age of Visions and Arguments* is too long, weighed down with details that should never have made the journey from note card to final draft, such as the original Chinese text of the *Book of Poetry* passage from which the ōmeisha (Singing Birds Society), a parliamentary political association, took its name (163). Despite the book’s length, Kim never conveys much sense of the rough and tumble of everyday politics. He comes closest in a fascinating chapter on public oratory as a form of political entertainment. But he barely mentions the role of gamblers and ruffians in party politics, an important topic captured vividly by Hasegawa Noboru in his *Bakuto to jiyū minken* [Gamblers and freedom and popular rights] (Tokyo: Chūō Kōronsha, 1977) and recently revisited by Eiko Maruko Sinawer in *Ruffians, Yakuza, Nationalists: The Violent Politics of Modern Japan, 1860-1960* (Cornell: Cornell University Press, 2008). Moreover, Kim is too quick to dismiss the sometimes virulent nationalist strain of the parliamentary movement, embodied by groups like the Gen’yōsha, which started out as a relatively pedestrian organization of local notables before veering off into terror at home and imperialist adventures on the Asian continent.

In exchange for these lacunae, however, Kim offers a wealth of material that one would not expect to find in a book about Meiji politics. The first chapter, for example, combines a clear narrative of the politics of the unraveling of the Tokugawa regime with a vivid account of the workings of the early modern public sphere, as manifested in things like woodblock prints freighted with satirical commentary on the leaders of the day. Kim includes it to highlight the continuities linking Tokugawa and Meiji notions of the public, and to make the point that a common understanding of the importance of public opinion (*kōgi yoron*) is what gave parliamentary discourse its legitimacy in the eyes of both activists and officials.

In sum, *The Age of Visions and Arguments* combines outstanding research with a finely honed argument. It will be the standard work in early Meiji political history for a long time to come.

Princeton University, Princeton, USA

DAVID L. HOWELL

THE ATTRACTIVE EMPIRE: Transnational Film Culture in Imperial Japan. By Michael Baskett. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008. viii, 216 pp. (Tables, photos.) US\$48.00, cloth. ISBN 978-0-8248-3163-9.

A significant volume of Japanese cinema scholarship has examined the filmmaking practices and film texts that reflect the cultural policies of Japan’s increasingly militarized Imperial regime. Although periods and places in focus are varied, all agree that cinema was an integral part of the empire-building project. However, many of the scholars primarily focused on the ways in which Japanese cultural producers, in collaboration with non-Japanese filmmakers, implemented Imperial policies in film texts during the fifteen-year-war (1931-1945) in particular. As a result, the questions around the convoluted sites of cultural consumption or the various audiences’ experiences of colonial cinema before, during, and after the wartime period remain unanswered.

The Attractive Empire refuses to identify Imperial Japan’s cinema as a mere one-way tool of its wartime propaganda. Instead, the book relocates it in a panoramic and dynamic cultural landscape of expanding Japanese empire in the Asian continent trembling under the threat of the Western colonial powers. Many detailed case studies drawn from original archival research illuminate a range of events and experiences of the colonial film culture in the Japanese empire. Some results expose curious contradictory cases and regional differences in terms of the reflection of imperial agenda and presumed reception patterns. More specifically, author Michael Baskett mobilizes the empire-themed films—films reflecting the Imperial cultural policy made in Japanese homelands and/or in colonial and semi-colonial spheres with or without the local filmmakers—as the iridescent cultural artifacts that invoked a seductive vision of Japanese empire. Thus, the book maps out the intricate nexus of reciprocity and coloniality by illuminating both voluntary and involuntary participation of the Japanese and non-Japanese creators and mass audiences in the construction and dissemination of coherent Asianness as a collective colonial identity.

The 154-page-long slim body of the book consists of an introduction and five chapters. The first chapter clarifies the differences in colonial film policies, filmmaking practices and spectatorship, and their historical changes, between the different colonized spaces of Taiwan, Korea, and Manchuko (1932-1945). The intriguing patterns of cultural consumption and media spectatorship are

Author HowellPublication Journal of EconomicTitle Capitalism From Within LiteratureIssue 33:3 1995

Howell, David L. *Capitalism from within: Economy, society, and the state in a Japanese fishery*. Berkeley and London: University of California Press, 1995. Pp. xiv, 246. \$38.00. ISBN 0-520-08629-5.

JEL 95-1200

Illustrates the indigenous origins of capitalism in nineteenth-century Japan with a case study of the fishing and fertilizer-processing industry of the northernmost island, Hokkaido. Addresses the relationship among commercialization, protoindustrialization, and capitalism, and examines the protoindustrial origins of Japanese capitalism. Discusses the rise and fall of the contract-fishery system in Hokkaido; the capitalist transformation; the institutions of a capitalist fishery; and the immiserating impact of capitalist social and economic relations on small fishers. Describes how many family fishers from Hokkaido moved to Karafuto after 1905 in pursuit of a dream of entrepreneurial success that was no longer possible in the declining Hokkaido fishery and examines how they struggled for fishing rights in Karafuto. Places the Hokkaido fishery within the broader context of early modern and modern Japanese history. Howell is Assistant Professor of East Asian Studies and History at Princeton University. Index.

Author Howell Publication Choice
 Title Capitalism from
within Issue 33:3 1995

CHOICE

November 1995 Vol.33 No. 3
 SOCIAL & BEHAVIORAL SCIENCES
 Economics

33-1648

HD9466

94-11838 CIP

Howell, David L. **Capitalism from within: economy, society, and the state in a Japanese fishery.**
 California, 1995. 246p bibl index afp ISBN
 0-520-08629-5, \$38.00

Numerous books describe how Japan came to be a major power in the 19th and early 20th centuries, but unlike the conventional approach that deals only with institutional and technological change, Howell probes the indigenous origins of Japanese capitalism. In this excellent work, the author presents a case study of Hokkaido's fishing and fertilizer-processing industry to trace the development of capitalism as a mode of production. He examines how a feudal institutional environment can give rise to capitalist production and how, in turn, nascent capitalist production can pressure state institutions to adapt to economic change. By using the Hokkaido fishery, the author shows the critical connection between Tokugawa protoindustrialization and Meiji capitalism as a coherent unit. Howell also brings into focus social groups like fishers and Ainu people. He successfully challenges the common assumption of a geographical center as the source of such changes. Howell makes use of an impressive number of Japanese sources, and the book contains many useful tables. Most highly recommended for upper-division undergraduates and above. - M. Y. Rynn, University of Scranton